

熊倉 優 (指揮)

Masaru Kumakura, Conductor

1992年東京生まれ。桐朋学園大学(作曲専攻)卒業及び同研究科修了。指揮を梅田俊明氏、下野竜也氏に師事。東京国際音楽コンクール〈指揮〉にて第3位、京都フランス音楽アカデミーにて最優秀賞(第1位)、ドナウ国際指揮者コンクールで第2位受賞。2016年から19年まで、N響首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィのアシスタントを務める。国内の主要オーケストラを指揮するほか、欧州ではハンブルク・フィル、ハノーファー州立管などと共演。21年8月からハンブルク国立歌劇場にてケント・ナガノ音楽総監督のアシスタントを務め、ドイツに拠点を移して国際的に活動が続いている。23年8月からハノーファー州立歌劇場第2カペルマイスターに就任し、年間約30公演を指揮する。



© 堀田力丸

山崎 亮汰 (ピアノ)

Ryota Yamazaki, Piano

1998年福島県郡山市生まれ。2023年、難関とされるブゾーニ国際コンクールで第3位及びジュニア審査員賞を受賞し、一躍国際的な注目を浴びた。12年ジーナ・バッカウアー国際ジュニアピアノコンクール日本人初優勝、13年福田靖子賞選考会福田靖子賞(第1位)、14年ピティナ・ピアノコンペティションにおいて史上最年少タイの15歳で特級グランプリ、併せて聴衆賞・文部科学大臣賞を受賞、16年クーパー国際コンクールで日本人初優勝、22年ケアロヒ国際コンクールで優勝など、輝かしい受賞歴を誇る。これまでに、クリーヴランド管、ボルツァーノ・トレント・ハイドン管、ハワイ響、東京シティ・フィル、日本フィルなどと共演。

現在、米国ロサンゼルスのコルバーンスクールで研鑽を積んでいる。



©anna cerrato

読売日本交響楽団 (管弦楽)

Yomiuri Nippon Symphony Orchestra



1962年、クラシック音楽の振興と普及のために読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビのグループ3社を母体に設立。創立以来、世界的な指揮者、ソリストと共演を重ねている。2019年4月からS.ヴァイグレが第10代常任指揮者を務め、サントリーホールや事業提携を結ぶ東京芸術劇場などで充実した内容の演奏会を多数開催。17年にはサントリー音楽賞などを受賞。22年12月には文化庁芸術祭大賞を受賞。演奏会などの模様はBS日テレ「読響 粗品と絶品クラシック」などで放送されている。

<https://yomikyo.or.jp/>



會津風雅堂開館30周年記念事業

読売日本交響楽団

指揮：熊倉 優 ピアノ：山崎亮汰

喜びの《ジュピター》

～モーツァルトを聴く至福の時～

2024年7月26日(金) 18:30開演

主催：公益財団法人会津若松文化振興財団、公益財団法人日本交響楽振興財団

共催：会津若松市教育委員会

後援：一般社団法人全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)、福島中央テレビ、福島民報社、福島民友新聞社



この演奏会は、競輪の補助を受けて開催します。

<https://jka-cycle.jp>

指揮：熊倉 優
Conductor : Masaru Kumakura

ピアノ：山崎 亮汰
Piano : Ryota Yamazaki

管弦楽：読売日本交響楽団
Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

《 プログラム 》

モーツァルト：ディヴェルティメント ニ長調 K.136 [約 12分]
MOZART : Divertimento in D major, K.136

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第 23 番 イ長調 K.488 [約 26分]
MOZART : Piano Concerto No. 23 in A major, K. 488

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Allegro assai

〈休憩〉 Intermission

モーツァルト：交響曲 第 41 番 ハ長調 K. 551 「ジュピター」 [約 40分]
MOZART : Symphony No. 41 in C major, K. 551 "Jupiter"

- I. Allegro Vivace
- II. Andante Cantabile
- III. Menuetto : Allegretto
- IV. Molto Allegro

モーツァルト：ディヴェルティメント ニ長調 K.136

作曲：1772年
初演：不明

ディヴェルティメントとは本来は気晴らしや娯楽を意味する言葉。音楽用語では、さまざまな編成による多楽章の器楽曲を指す。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は多数のディヴェルティメントを残しており、初期の作品でよく知られているのは、1772年初めに書かれた K.136 から K.138 までの 3 曲のディヴェルティメントだろう。なかでも K.136 は演奏頻度の高い人気曲である。当時、モーツァルトは 16 歳。天衣無縫の楽想が作曲者の神童ぶりを伝える。

編成は弦楽器のみ。弦楽四重奏でも弦楽合奏でも演奏される。

第 1 楽章 アレグロ

晴れやかで爽快な主題で開始される。もともと有名な楽章。

第 2 楽章 アンダンテ

典雅で安らかな緩徐楽章。

第 3 楽章 プレスト

第 1 楽章の主題が変形されて現われる。後半では生真面目な表情を見せつつも、最後は上機嫌で曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第 23 番 イ長調 K.488

作曲：1786年
初演：1786年、ウィーン

1786年、ウィーンで絶大な人気を誇っていたモーツァルトは 30 歳を迎える。2 か月後にオペラ「フィガロの結婚」の初演を控えた 3 月に、ピアノ協奏曲第 23 番イ長調が書きあげられた。同時期に書かれただけあって、この曲にはどこか「フィガロの結婚」にも通じる絶頂期の創作者ならではの筆の勢いと伸びやかさが感じられる。

作品はピアノ協奏曲第 22 番および第 24 番とともに、四旬節の演奏会のために作曲されたと推定される。傑作ぞろいのモーツァルトのピアノ協奏曲のなかでも屈指の人気を誇るが、楽譜が出版されたのは作曲者が世を去ってから。モーツァルトの遺産を未亡人コンスタンツェから購入したヨハン・アントン・アンドレが 1800 年に出版している。

オーケストラの編成はオーボエを欠き、代わって当時の新興楽器であったクラリネットが使用されている。作曲者ウィーン時代のピアノ協奏曲としては珍しくトランペットとティン

パニが用いられておらず、祝祭性よりも室内乐的な親密さが前面に押し出されている。

第 1 楽章 アレグロ

オーケストラが優美でしなやかな主題を奏で、これに独奏ピアノが応答する。終結部の前に作曲者自身によるカデンツァが書き記されている。

第 2 楽章 アダージョ

明るい前楽章から一転して、憂いを帯びた楽想が陰影豊かに綴られる。引きずるようなシチリアーノのリズムが特徴的。

第 3 楽章 アレグロ・アッサイ

ジャンプするような独奏ピアノの主題で勢いよく開始され、はつらつとした楽想がくりひろげられる。スピード感あふれる華麗なパッセージに喜びが横溢する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

モーツァルト：交響曲 第 41 番 ハ長調 K.551 「ジュピター」

作曲：1788年 8 月 10 日
初演：不明

モーツァルトは、最後の 3 つの交響曲（第 39 番、第 40 番、第 41 番）を 1788 年の 6 月末から 8 月にかけてのわずか 2 か月で完成させた。1781 年にウィーンに移り住んでから、モーツァルトの交響曲の作曲はぐっと減ってしまったが、再び量産するようになったのには、何か理由があるのだろうか。知人に借金を申し込む手紙を書いたのもこの年だが、実際にはそれほど困窮してなかったようだ。近年の研究では、ウィーンもしくはイギリスでの演奏、または曲集としての出版が最初から意図されていたという仮説が立てられている。いずれにしてもモーツァルトの全交響曲のなかでも最高傑作とされるこれら 3 曲は、それぞれ異色の、個性輝く作品となっている。

第 41 番は「ジュピター」の愛称で親しまれているが、これはモーツァルト自身によるものではなく、ハイドンをロンドンに招聘したことで知られる、ヴァイオリン奏者で興行師のザロモンによって名づけられた。ギリシャ神話最高神ゼウスの英語名「ジュピター」の名にふさわしく、王者の風格をもつ華麗で厳格な交響曲である。

第 1 楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

全楽器で堂々とハ長調の主音（ド）を 3 回強調して始まる。祝祭的な雰囲気でも力強い第 1 主題と歌うような第 2 主題が示される。

第 2 楽章 アンダンテ・カンタービレ

典雅で繊細な音楽が穏やかに流れる。ヴァイオリンで優美な第 1 主題が奏でられ、暗く陰りある部分を経て第 2 主題が現われる。

第 3 楽章 メヌエット：アレグレット

壮麗で軽やか舞曲。冒頭の半音階で下行する音型が特徴的。中間部で終楽章の主題の音型が先取りされる。

第 4 楽章 モルト・アレグロ

「ジュピター音型」と呼ばれるド・レ・ファ・ミから始まる第 1 主題が何度も現れて全体統一する。のびやかな第 2 主題。コーダでは第 1 主題がフーガ風の模倣書法で圧巻の展開をみせる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉